

社会事業・医療などの展開と仏教の現代化



奈 倉 道 隆

一、仏教の現代化の意味

仏教は、すべての人を一切皆苦の人生から、解脱と救済によって、究竟安穩の境地に至らしめようとする道である。

したがって、仏教の現代化をはかるということは、現代における諸々の苦悩を、仏教の根本理念に基づいて解決しようとするにはかならない。

ここにいう仏教の根本理念とは、いうまでもなく諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜の三法印であり、縁起の法である。

そして、仏教が大乗仏教である限り、自己一人の悟りととどまることは許されず、自他共に転迷開悟を得る菩薩道であること、さらに浄土教にあっては、「衆生と共に安樂国に往生せんことを願う」願生として、社会において積極的にはたらきかけをおこなうものでなければならない。

大乗仏教は、つねにその時代に生き、その地域社会に生きる仏教であるべきであり、その意味で、現代化される仏教こそが大乗仏教であるとさえいえる。

以上のことから、筆者は仏教の現代化ということを、次の二点に焦点を合せて考えていきたいと思う。一つは、現代における苦悩、とくに生老病死の四苦を、縁起の法に基

づいていかに認識するかということ、もう一つには、これを大乘仏教の精神に基づいていかに解決していくかという実践方法についてである。

現代における苦悩は、歴史的・社会的背景の相違から釈尊在生中の苦悩とは異なるものが少なくない。しかし現代においても、「生きる」ということにともなう内面的・社会的苦悩、「病む」ということにともなう苦悩、「老いてやがて死する」ということにともなう苦悩は根本的な苦悩である。

そこで現代における四苦の問題をこの三つに分け、それぞれに対応する現代的努力の方法をかえりみながら、仏教のかかわりを考察してみたいと思う。

二、生きる苦悩とカンセリング 及び社会福祉事業

生きる苦悩には、内面的なものもあれば社会的なものもある。しかもそれらは相依相成の關係にあって各々が独立して存在するものではない。

ともすれば、宗教は内面的な苦悩のみに関心を寄せ、社

会的な苦悩の解決には消極的な態度をとりがちである。しかし大乘仏教においては、「共に生きる」という社会性が最も重要視される。人間を孤立した存在としてではなく、社会的存在とみるところに生命がある。したがって、内面的な苦悩だけではなく、社会的な苦悩とのとりくみが不可欠とされなければならない。

このような観点から、生きる苦悩を内面的な苦悩の面と社会的な苦悩の両面に注目しつつ、それぞれの解決方法を考えてみたいと思う。

(1) 内面的苦悩とカンセリング

こんにち、内面的な苦悩を解決する方法としてカンセリングが用いられている。このカンセリングは、方法上の相違から指示的カンセリングと非指示的カンセリングに大別される。

指示的カンセリングは、相談者が来談者（苦悩をもつ人）に面接するに先立って、来談者の性格・能力・健康状態・家庭環境などを調査し、予備知識をもった上で面接して、問題の所在と原因とを明らかにしつつ、問題解決の方法を相談者が指示するものである。ごく最近までは、「相

「談」といえばこのような指示的カンセリングがおこなわれていた。

これに対し、非指示的カンセリングというのは、相談者が来談者にあれこれと問題解決のための指示を与えるようなことをせず、もっぱら来談者のありのままの気持を受け入れ、来談者自身がみずから問題解決の方法を発見し、決意してそれにたちむかうのを待つという方法である。

すなわち相談者は、来談者に関する予備知識をもつことなしに、二人が自由に語り合える雰囲気を作り、来談者の感情が自由に表明されるように心をくばりながら、相手の感情を無批判に受容するという面接法をとる。決して、こうしてはならぬとかこうしなければならぬといった指示は与えない。人間には誰しも成長・発展・健康になろうとする衝動がそなわっており、苦悩を克服する力が来談者自身の中にあるという信念をもつてどこまでも支持的に接し、建設的な衝動が発露するのを待つのである。

この二種のカンセリングのうち、前者は相談者の指導的力によって問題を解決しようとするので「相談者中心の方法」と呼び、後者は来談者自身の力によるという意味で

「来談者中心の方法」と呼んでいる。

苦悩する人自身の中に、成長発展の衝動や問題を解決する力が潜在していることを信じて、温くいたわりながら来談者を支援するという来談者中心の方法は、相手の仏性を信じて慈悲の心で支援するという仏教精神に相通ずる面がある。しかし、縁起観に立つて厳密に論ずるならば、問題解決の力が来談者自身の中にあると限定する考え方は、それが相談者の側にあると考える相談者中心の方法と同様に、正しいとはいえない。

縁起観においては、相談者も来談者も、これを別々の存在として対置する見方をしない。両者は相依相成の存在であり、これあってかれあり、かれあってこれありという相互関係の中で位置づけられてゆく。したがって、どちらを主体と考える考え方も正しいとはいえないのである。

問題解決の力は、相談者から来るのでもなければ、来談者から来るのでもない。そしてまたその両者のみから来るのでもない。万物万象ことごとくが相互関係的に関与し合って解決の力となっているのである。いうなれば縁起の方法による力が問題を解決していくのである。

浄土教では、縁起の法を人格化した阿弥陀仏を恭敬し、阿弥陀仏の大慈悲によって苦悩が解消すると説く。すなわち苦悩は他人によって解決されるのではなく、また自己の力によって解決されるでもない。万物万象は阿弥陀仏のはからいによって変化し調和安定に向うものであるから、小ざかしい己れのはからいを捨てて阿弥陀仏におまかせすることである。自己のなすべきことは、もっぱら阿弥陀仏に帰依すること、縁起の法に従順となることである。苦悩を解決したいと願う心すら捨てて、一心に阿弥陀仏に帰依する決意を表明すること——念仏すること——であると説く。

したがって、仏教においては、自己にも他人にも頼ることなく、ひたすら自己を仏に捧げ、仏の慈悲を受入れる「受容的態度」になることが最も大切であると教える。

カンセリングにおいても、率先して相談者があらゆるものを無批判に受容することが要求される。来談者は、相談者が温く自己を受入れてくれたという体験に基づいてまず自分自身を受入れ、自己をかえりみる態度をとる。自己をかえりみることによって今迄執着していた迷妄に気づき、

その迷妄から脱脚せんとする向上心が湧きあがってくるのである。

仏教のカンセリングにおいては、来談者が自分自身を入れるだけでなく、阿弥陀仏の大慈悲を受入れる心がまえがつくられていくのでなければならぬ。そのためには、まず相談者が阿弥陀仏の大慈悲を深く受入れ、来談者と共に苦悩を越えた世界——安楽国——に往生せんと願う心で来談者を支援していくことであると考える。

なお、仏教のカンセリングについては、藤田清氏の「仏教カンセリング」という著書（誠信書房一九六四年刊）があり、釈尊の説法そのものがカンセリングであること、仏教のカンセリングとロジャースの非指示的カンセリングとがどのように異なるかなどについて論じておられるので、一読をおすすめしたい。

(2) 社会的苦悩と社会福祉事業

内面的な苦悩に対し社会的な苦悩すなわち貧困・失業・児童問題・家庭崩壊・心身障害・疾病・老後問題などとはどうであろうか。疾病と老については次章にゆずるとして、これらは社会福祉の重要な課題である。

近代社会福祉においては、これらの社会的苦悩に対して、問題をまず社会科学的に認識すべきことが強調される。単に苦悩が無くなればよいという無原則的な努力は戒められ、また社会的困難は「救済」されるべきものでなく、基本的人権が全うされるように正常な生活への「回復」がはかられるべきものであるという認識の上に立つ。

近代以前の社会事業、とりわけ慈善事業においては、施与者が困窮者を救済するという形態をとり、その救済は困窮者自身の必要性に基づくよりも施与者の主観的意図に従って一方的に与えられる傾向があった。

このような性格の慈善事業は、仏教の立場からは正しいと認められない。仏教は縁起觀に立ち「能・所」すなわち主体と客体とを分立させないで相依相成の關係にあると説くものであるからである。華嚴の「自利即利他」の菩薩行においては、施与者は与える者であると同時に（施与者の立場が）与えられたものであること、さらに、施される者も与えられる者でありながら施与者に与える立場を与えているという相依性が強調される。

大乘仏教は自他ともに転迷開悟を得んと志すものである

り、とくに浄土教においては、人間すべて平等に、阿弥陀仏の本願によって生かされる者同志として、共に理想的な社会（安楽国）を建設して生きよう（往生しよう）とはげむものである。

したがって仏教の社会事業は、慈善事業のように人が人を救済するのではなく、ともに努力することによって困窮者が人間本来の生活に復帰できるよう「回復」をめざすものであり、近代社会福祉事業の理念に極めて近いものであるといわなければならない。

また、近代社会福祉において人権の尊重が基本理念とされるが、この人権の概念も一面において「仏性」と相通ずる面をもつように思われる。涅槃經の衆生皆悉有仏性の句が示すごとく、仏性はすべての人に本来的に具わる完全性・尊厳性を意味する。「仏」をホトケと訓読するのはホトケルという語に由来するとさえいわれるほど、束縛から解放された自由な存在を意味する。仏道の目ざす「成仏」ということが、一切の束縛から解脱して人間本来の自由な存在になりきることを意味するのもそれである。

人間が生まれながらにもつ自由で平等に生きる天賦の権

利を人權と呼ぶならば、このような人權は仏性に相通ずる面をもつといえる。近代社会福祉を貫く人權尊重の理念は、仏教が説く「お互いの仏性を拝み合う」ことによって強化されるであろう。またそれと同時に自分の権利のみを主張して他人の権利を無視する誤った權利思想を是正していくこともできよう。

孝橋正一氏は「社会科学と現代仏教」という著書（創元社一九六八年刊）の中で、「社会事業は、現に存在する改革されるべき社会的障害状態を社会科学的に認識する努力と、問題解決のために実践していく主体的契機との結合によって成り立つ」と述べている。そして、主体的契機となるものはキリスト教の愛や仏教の慈悲であるとして、華嚴の菩薩行を高く評価している。

このような考え方は近代社会福祉学の立場からは卓説といえるが、仏教社会福祉事業の立場では、「現に存在する改革されるべき社会的障害状態を認識する努力」があくまでも仏教の縁起観に基づく認識方法でなければならぬことと、さらにこの問題の認識のしかたが実践の主体的契機（すなわち菩薩行）を強めるようなものでなければならぬ

いと考える。

社会科学的に認識するということは、近代社会科学すなわち史的唯物論の上に立つ階級的認識に立つて社会問題を見るということであろう。社会を生産関係の基盤の上に立つて眺める以上、その論理的帰結としての史的唯物論は妥当性をもつといってよい。しかし科学はあくまでも前提の上に成り立つものであり、史的唯物論は人間の物欲を絶対視することを前提としている。

仏教においても、物欲にとらわれた人間を直視し、欲望の依って来たる所と、その帰結を十二因縁によって説くが、物欲を絶対視することはいらない。あくまでもこれは現象面の「有」の姿であって、本質は「空」である。そして「空」でありながら「有」となり、しかも両者を越えていく「中」の概念が大乘仏教では説かれている。

すなわち、仏教は唯物論でもなければ観念論でもなく、それらを越えたところにももの真髄を見出していくのである。したがって、唯物史観に立つ社会科学を、あくまでも科学として尊重しながら、しかもそれにとられることなく真の人間の幸福を求めていくのが仏教社会福祉事業の立

場である。

したがって改革されるべき社会的障害状態が資本主義社会の弊害の現れであることを認めながら、同時にそれだけにとられず、自分自身をも改革の対象として改めていく。相依性を基盤とする縁起観に立つ限り、どのような社会悪も自己と無関係に成立っているものではなく、己れをさておいて改まる社会悪もないからである。そのことは同時に、自己を改めるだけで問題が解決するように考える主観主義をも排除していく。仏教では、自他共に、衆生と共に改革していくことが社会問題解決の実践目標となるのである。

このような問題認識があつてはじめて、自他共に転迷開悟をはかる菩薩道が、社会福祉事業の主體的契機としての意味をもち、実践をおしすすめる力になるものと考ええる。

したがって仏教が社会福祉事業ととりくむ場合、単に慈悲の精神でもって近代社会福祉事業を推進すればよいというのではなく、あくまでも仏教の根本思潮、縁起の法に照らして社会問題の本質を明らかにしつつ、それが根本的に解決されるように事業をすすめていかなければならない。

このような努力こそ、社会的苦悩を根本的に除去し眞の福祉をもたらすものであると同時に、仏教を近代化する原動力になるものであると考える。

三、病の苦悩と医学

こんにち、病の苦悩は医学の問題とされている。そして近代医学は近代科学の上に立ち、西洋近代思想によって裏付けられている。この西洋近代思想は、科学的合理性と人間個人の尊重という二つの軸をもって展開する。

この科学的合理性と人間尊重の理念は、西洋の中世的思潮すなわち神学と神中心の理念に反発して形成されたものであるため、キリスト教と科学との分離、神中心でなく人間中心を意図している。このキリスト教と科学との分離が、一切の宗教と科学とは相いれないものであるという觀念を生み出している。

しかしながら仏教は、万物万象の根本法則を説くものであり、科学と反発しあうどころか、むしろ科学を包括するものである。このことについては、自然科学者の山本洋一氏が「仏教と自然科学」という著書（教育新潮社一九六九

年刊)の中でくわしく述べておられる。

科学の中でも特に医学については種々の經典すなわち金光明最勝王經、摩訶僧祇律、摩訶止觀などがくわしくとりあげており、近年、それに対する医学的な考察がすすめられて「仏教医学」と呼ばれる研究分野がつくられつつある程である。

このような観点から、科学とくに医学に対して仏教は離反するものでなく、むしろ本来的に摂合しているものであり、近代科学の欠陥をおぎなう役割すら仏教はもっていると考える。

というのは、近代科学はデカルトの分析的思考を基盤として発展したため、因果論と形式論理に偏重し、合理的ではあるがいつのまにか人間疎外を起すという問題をはらんでいる。工業技術の発達にともなう生活環境の破壊、農業技術の発達にともなう食品公害、システムの能率化とスピリット化にともなう不適応現象などがそれであるが、近代科学を基盤とする医学もまた、同様の人間疎外の問題、たとえば薬品の副作用や医原性疾患の発生などをもたらしつつある。すなわち近代思想のもつ科学的合理性の理念と人間

尊重の理念が両立しえなくなってきた。

これに対し、仏教における医学思想は縁起觀の上にたつものである。疾病が形成される要因についても、近代医学がなるべく単一の因子ないしはその組合せによって説明しようとするのに対し、仏教の立場では無数の要因が相互關係的に作用しているものと考ええる。したがって治療方法も、ただ薬物を投与するというのではなく、生活の調和をはかり、精神の安定をはかり、看護の充実をはかりながらその時々々の病状に応じた処置をしていくのである。

そして近代医学が、ともすれば病氣と病人とを分離し、病人を忘れて病氣の治療に専念するのに対し、仏教の医学はあくまでも人間を生かす医学として病人を対象とし、病を克服する努力を通して一層人間の向上をはかろうとするものである。

このような考え方は、本来の近代医学と決して矛盾するものではなく、むしろ近代医学の欠陥を克服して、医学を、より完全な医学へと高めていくものである。

近代医学は短期間の間に長足の進歩をとげてきたが、それだけに近代医学のもつ問題点も深刻になりつつある。こ

のような時にこそ仏教の医学思想が重要視されなければならない。仏教における医学活動は、近代医学と別個のものとして存在するものでなければ、近代医学による医療をそのまま普及させていくものでもない。

万物万象の根本法則である縁起の法に照らして近代医学の欠陥を改めつつ、これがより多くの人々を生かす力となるよう強めていくことが現代における仏教医学の役割であると考ええる。

このような眞の医学によって病める人々の苦悩ととりくむ医療を推進していくことが仏教には要求されており、またこのような努力が、仏教を現代化する力になるものと考へる。

なお筆者は、現代医学の問題点を天台智顗の摩訶止観に基づいて考察した論文を、仏教大学仏教学科の卒業論文として報告した。ブーユルヴェーダ研究第四号（一九七四年刊）および仏教大学通信教育部論集第十号（一九七五年刊）に掲載されている。

四、老・死の苦悩と老年学

老人問題が深刻化しつつある今日、いろいろな角度から「老い」が問題とされ、これと総合的にとりくむ科学が「老年学」として形成されつつある。しかし老年学という学問の目的・方法については、まだ確立される段階に至っていない。確立されていないというより、近代科学のみに依拠しては確立しえない性格をもつものではないかと考える。「死」の問題に至っては、一層その傾向が強く、これを扱う科学は全く無いといってよい。

近代西洋思想においては、人間を「欲求と行動」の存在とみる。そして、人間をとりまく環境を「欲求充足、行動の場」として位置づけている。

人間をこのようにみる限り、欲求と行動が盛んな成人期が人間存在の標準となり、小児はそれに対して未熟な人間、老人は衰えた人間という価値判断をせざるをえない。また環境に対しても、環境を人間に従属させるべきであって、人間が環境に従うという考え方は忌避される。何故なら、人間が環境に従うのでは欲求充足と行動が外部から制

約されることになるからである。

このような考え方の中にあつては、老人は衰えたもの、生活が困難なものであるというネガティブな位置づけがなされる。その結果、老人は「保護されるべきもの」という見方で老人問題が処理されていく。そこには老年を生きぬく積極的な価値が見出せない。

しかるに仏教においては、ものごとを固定して見ず、変化するものとしてとらえる。子供から成人、成人から老人へと変化し、やがて死に至るのが人間であり、子供の時代には子供としての人間、老年期には老人としての人間があるのであつて、固定した標準をもうけない。したがつて老年をネガティブなものとして価値づける必要もない。

また仏教においては万物万象を相依相成の存在とみるのであり、人間が環境を従属させるのでもなければ、環境が人間を支配するのでもない。「人間」も「環境」も無数の事物の相互関係の中に成立つものであり、その両者もまた当然相互関係をもつものと考ええる。

したがつて、仏教の生き方においては、人間の欲求を基準にして環境を人間に都合よく変えようとはしない。人も

環境も、ともに生きるものとして眺め、環境も変えるが、人間も変えるという柔軟な生き方をする。それ故、老人は老人として無理なく生きる生き方を知恵によって生み出すべきであつて、成人の生き方を絶対視し、老人は生活しにくいものだと思ひこむようなことはしない。

老年期においては、生体の防衛反応が弱まり、生理的予備力が低下する。そしてさらに環境への適応力が低下する。このことは生物としては生存に不利な条件であるが、人間は知恵をもつ存在であり、将来に起りうることを予見したり、それに備えて努力することができるとのである。防衛反応が低下するということは自然との闘いを不利にする条件ではあるが、不必要な闘いを避けることによってその不利は補なわれる。現実の生活においては、病原菌との闘いすなわち感染性疾患などを起こさないように予防するとか、ひとと和合して争わないように暮すとかいった努力がそれである。

生理的予備力の低下は、無理のきかない体になることであるが、これに対しては、無理のない生活を工夫していくことである。

環境への適応力の低下は、環境に順応しにくくなることであるが、なるべく順応しやすい環境を選ぶとか、環境を順応しやすく改善するなどの努力によって補なうことができる。

要するに、縁起観にもとづく生活においては、相依性をふまえることによって、老年者は老年にふさわしい生き方ができるのである。

また、老年期には、身体は老化しても精神は老化しないといわれている。もとより精神機能の中には、記銘力や計算力のように年と共に衰えるものもあるが、これらはメモをとるとか、計算器を用いるなどの方法で補うことができる。それに対し人間でなければできない判断とか直感の能力は年と共に深まっていく。人間として最も大切な知恵は、老年において最も輝きを増すのである。

仏教においては、万物を最後まで生かすことを考える。

老人をどこまでも人間存在として生かすことが、これからの老年学の目的とされなければならないし、それに寄与しうる科学や仏教が、老年学の方法を生み出していかなければならない。

最後に死の苦悩に対するとりくみについて述べたい。

従来は死が病苦の窮極の姿としてとらえられてきた。しかし老衰や老衰に近い死亡が増えつつある今日、死を病苦の延長線上でのみとりあげるのではなく、むしろ老年学の問題としてとりあげていく必要がある。

老衰あるいはそれに近い死亡においては、死は瞬間的なものでなく、一つの過程として現われる。すなわち、呼吸や脈搏が止まるという瞬間が死のすべてではなく、それは生物としての死にすぎないもので、その前に心の働きが止る心理死があり、社会的営みが終る社会死がある。この社会死・心理死・生物死の三つの死が、多くの場合同時にではなく、むしろかなりの間隔をもってゆっくりと訪れる場合が多い。また、その生理的な死すら瞬間的ではなく、数十年前から始まる老化現象の連続的な変化の過程の中で迎えるものである。すなわち、人間は生きながら死につつあるのであり、死の過程の中に生が営まれているのである。

このような死は、調和安定をめざして変化する生きものの窮極の姿であり、まさに仏教でいう「涅槃」にほかならない。この涅槃の意味をふまえて死の問題を考えるなら

ば、死を理性的に追求する学問も成立つてあろう。

浄土教における「安楽国への往生」は、いろいろの意味に解されるが、死の苦悩をのりこえて、生の意義を積極的に高揚する生き方を示唆するものとも理解される。

本稿のために与えられた紙数が尽きたので、これについては稿を改めて述べたいと思う。

以上、人生の根本的苦悩である「生老病死」との現代的

シンゴウとカンコウ

大和の斑鳩町には国宝級の仏閣や竜田神社や名所古蹟が、青垣山こもれる大和にふさわしい景観にしくりととけこんでいる。そして近郷はもとより全国的に人々をひきつける。町社協総会へお伺いしたついでに、ポックリ寺といわれる吉田寺へ案内してもらった。寺のわきにはいつものようにだそうだが四合の大型バスがとまっていた。本堂には丈六の阿弥陀如来の前に、老人たちが所せましと坐って、和尚の説教にききいていた。一回こっきりの行きずりの観光客ではない。信者なのである。また国宝のたくさんある法隆寺には毎年多数の参拝客があ

なとりくみ方をかえりみながら、これを解決していく上に仏教が大きな力をもつものであることを考察した。

この大きな力を発揮し、現代人の苦悩と積極的にとりくむことが、仏教を現代に生かすことであり、仏教を現代化することであると考える。

(京都大学医学部助手・老年医学)

ってそこは見学とか観光客で賑う。しかし大たい一回きたらあとは滅多にこないそうである。どちらも大きな収入になるそうであるが、シンゴウとカンコウの差は金の多寡ではない、そこに大きな意味のちがいがあ

「お寺は結構なもんですなあ、じっとしていても、ちゃんと向うから銭もってくるのやから」

と、駅の売店の前で五十がらみのおばはんがいていた。そして

「わてら、近くにおっていっこうにまいりまへんけどと……」
つけ加えた。